

# 砂漠の白い花

山根昭郎著

Amazonから刊行のおしらせ



湾岸戦争の予兆が見え隠れしていた1980年代前半のクウェート。携帯電話の黎明期、日本の若き商社マンが砂漠の地に通信網を築こうと奮闘していた。

異文化、宗教、民族の壁に翻弄されながらも、人と人が通じ合おうと努力する高宮隼人、クウェートに嫁いだ紗栄子、複雑な運命を背負うパレスチナ人女性技師ライラ。彼らはただ、仕事のために、あるいは生活のために、その地にいたのではない。

そこには、人生を賭けた情熱があった。心を揺さぶる、著者渾身の国際ヒューマンドラマ。



ご購入のお申込みは次から  
<https://amzn.asia/d/j19JsHq>

## Amazonブックレビューでの感想

### 花言葉の意味を知って

砂漠の白い花(Desert Lily)一気に読了しました。

文章力、ストーリー構成力は流石でした。

私のクウェート駐在時代はこの小説の数年後になるのですが、往時のビジネスに関わったクウェイティ、日本人、パレスティナ人を彷彿とさせてくれました。インド人とはビジネス接点はなかったのですが、クウェート人の配下で働くインド人はさぞダンのような人物だったんだろうなと思いました。

紗栄子さんの女性の矜持、ライラのパレスティナ人としての矜持はまさに砂漠の白い花ですね。登場人物からは、総合商社通信インフラ部隊の矜持を強く感じました。小説の中で、ダンとライラの確執、日本人は空気に流される(大和の特攻)以下の下りが特に面白かったです。

### アラブ人、インド人相手の交渉の厳しさ

イスラム圏の人との臨場感溢れる交渉は身につまされる。

筆者のあとがきも感じ入るところあり必読の部分である。

### 感動

凄まじい商社の内幕とアラブ社会、たとえどんな時代や生き馬の目を抜くビジネス社会にあっても人間としての理想、理念、愛は永遠なれ！！

### 置かれた場所で咲く美しさ

海外で通信網の整備に奮闘する商社マンの物語。

私が生まれた頃には携帯電話があり、高校生になったらスマートフォンを持っていました。

便利な良い時代に生まれたと思っていましたが、それは先人の頑張りの賜物。異国でのビジネスの駆け引きには手に汗握るものがありました。

「良い天気ですね」の挨拶は、クウェートでは雨の日を、日本では晴れの日を指す、という言葉が印象的でした。

言葉1つを取ってみても、立場が違えば全く違う受け方をします。

そんな中でのビジネス合意は、言葉では言い表せない程の大変さと、やりがいがあったのだらうと想像しました。

読み終えた時、題名の「砂漠の白い花」は、自分の置かれた場所で咲くことの美しさ、という意味もあるのだらうと感じました。

### 日本人の再生への覚悟を問う良書です

1980年代半ば日本経済は絶好調だった。日本企業は世界を相手に打って出て、自動車、家電、半導体は世界のトップを争う地位にあり、日本人は自信に溢れ仕事に邁進していた。まさに日本は世界第二位の経済大国だった。

翻って現在は地位の地盤沈下は著しく、日本全体が閉塞感に覆われている。

本書は当時の明るい未来を信じていた時代を鮮やかに描いており、読了後にノスタルジックな思いにとらわれた。困難に対して前向きに立ち向かう覚悟を改めて問う契機になるものである。

### 一気読み

1980年代の非常にリアルな中東の様子が描かれています。

海外ビジネスに夢をかける商社マン、異国に嫁いで行った日本人女性、歴史に翻弄された民族の思いを秘めたパレスチナ女性、3人の人生が交錯しながら、物語が展開します。

主軸となるアラブビジネスの駆け引き、立場によって思いが異なる入札のやり取りなどは、ビジネスを知らない私でも大変興味深く、一気に読むことが出来ました。また、中東の家族主義の中で周囲に尊敬されながら生きる日本女性を知っていますが、彼女にもこんな葛藤があったらうかと、考えさせられるものでした。

一貫して見えてくるそれぞれの登場人物の、人としての矜持に胸が熱くなり、気持ちの良い読後感の作品でした。

### とても読みやすかった

イスラム圏の人との臨場感溢れる交渉は身につまされる。筆者のあとがきも感じ入るところあり必読の部分である。